

作って遊ぶ “動く”造形

身の回りにあるもの全てが〈素材〉になります。光や音、空気といった造形と直接関係がないと思われるものでも、その特性を改めて造形素材として見直すことで、今までとは違った見方で〈もの〉や〈こと〉と出会うことが可能です。目に見えないものも造形素材にしてみましょう。



「クルくるーん」

私たちはひとつの物質によって、身のまわりを取り囲まれています。生活に密着していながら、無色透明であると同時に、水のような抵抗感や感触が希薄なため、その存在自体を忘れてしまいがちな物質「空気」です。

地球上に生きる多くの生物にとって必要不可欠なはずの「空気」ですが、実際には風という現象、深呼吸や、匂いによる知覚など、特別な場面を除けば、ほとんど意識されることがありません。この「空気」をテーマにプログラム化するためには、空気の性質を知ること、空気を感じとることが重要になります。

空気に関連する言葉を探したり、身の回りにある空気を利用した機械や乗物を調べたり、鳥や飛行機が飛ぶのはどういう仕組みなのか、他にも空を飛ぶ生き物や乗物はないのか、自然の物から人工的な物まで、空気にも少しでも関係のありそうな事柄を多く収集することで、幅のある造形プログラムへと発展していくことができます。

「クルくるーん」は、紙の板の両端にフィン（羽根）を付け、押し出すように投げると、水車のように回転し空気をかき出しながらいく飛んでいくおもちゃです。

造形活動に欠かせない要素に〈素材〉があります。紙、木、粘土などは一般的な素材と言えますが、形のない音や光、そして、空気を素材にしたらどのようなことができるでしょうか。身の回りに当たり前のよう存在する空気をどうしたら意識することができるのでしょうか。

空気のプログラムを考える場合、空気の性質や特徴を調べることはもちろんですが、空気を利用して飛んだり動く乗り物や動物、空気で作動する道具、玩具、そして、自然の中にある植物の種子などを見てみると、空気を利

用したメカニズムが理解できます。

空を飛ぶ植物の種子で私たちが最もよく知っているものに「タンポポ」があります。風を受ける綿毛と重心となる種子が離れているため、どんな風の中でも安定して飛ぶことが可能です。たんぽぽ以外にもグライダーの原型になったといわれる「アルソミトラ」という東南アジアに生息するつた植物などもあります。自然を観察することが造形活動につなげていくヒントになります。広い視野で造形活動をとらえなおしてみましょう。

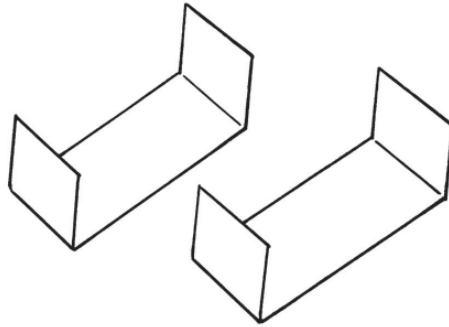
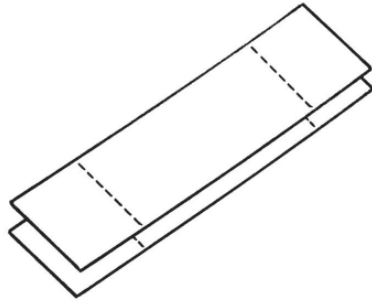
□「クルくるーん」の作り方□

□「クルくるーん」作りで使う道具□

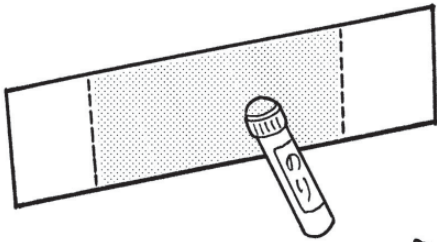
はさみ / 水性ペン / 水のり

□「クルくるーん」の材料□

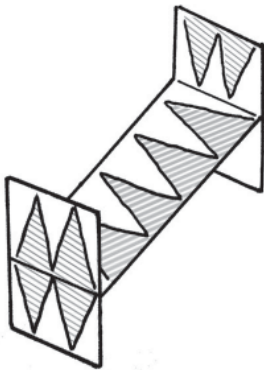
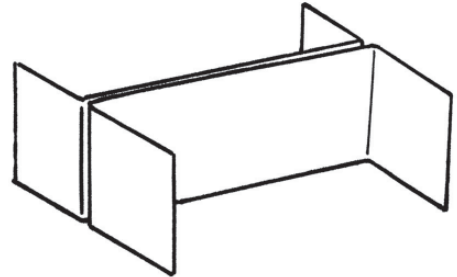
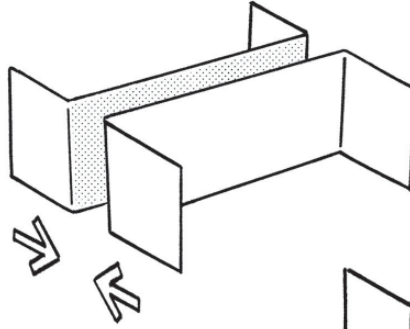
白い紙の帯2枚 (4 × 15cm)



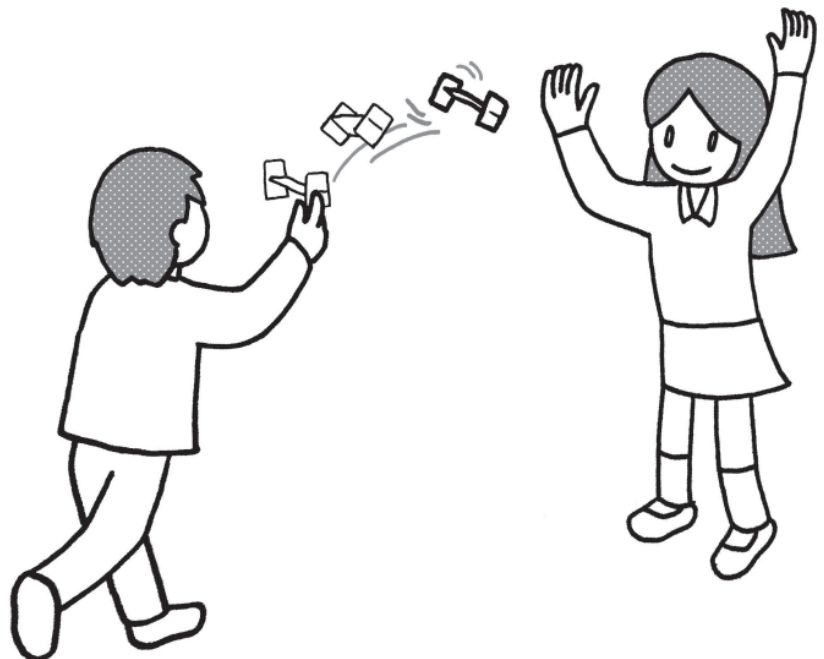
① 紙帯を2枚重ねて、両端を1 cm 位の幅で折る。



② 折り目の内側にのりをぬり、背中合わせに貼る。



③ 全体に水性ペンで模様を描く。



④ 貼り合わせた部分を指でつまんで前方にそっと押し出すとくるくる回転しながら飛ぶ。

イラスト：横須賀ヨシユキ